

生活の中の
仏教語

「天狗」について

ほっと通信編集委員 金城 隆寛

私たちは社会生活の中で実に多くの方と意識せず接しています。その中には実に謙虚な方もいれば時に横柄で傲慢な振る舞いをする方もいるかと思います。そんな自らを驕り高ぶる人を「天狗になっている」ということがあります。そもそも天狗とはどんな存在なのか、今回は触れていきたいと思います。

天狗は日本人の靈魂観や原始的な神靈観に基づく靈的存在であり、善悪両面を併せ持つ特徴があります。庶民信仰の対象として広く受け入れられ、絵画・彫刻・芸能・文学・口承伝承など、さまざまな文化表現の中に描かれてきました。とりわけ天狗信仰を体系的に取り入れたのは山岳宗教である修験道であり、そのため一般には「天狗＝山伏」というイメージが定着しました。

修験道における天狗の本質は、山神・山霊と怨霊に由来します。善天狗は修行者や霊場を守護する護法善神として信仰され、山の神として寺院や奥院に祀られました。こうした天狗は、開山の高僧や行力ある山伏に従い、守護霊であると同時に使役霊として働き、自在に飛行し、靈力によって物資を運ぶ存在と信じられました。平安時代には天狗は天童や金剛童子と呼ばれ、童子形で表現されることも多く、絵巻や説話にその姿が描かれています。

一方、山神の荒々しい側面が投影され、暴風雨や人攫いなどの怪異をもたらす悪天狗の観念も生まれました。天狗という名称自体は『日本書紀』舒明天皇9年(637年)に見られますが、当初は流星現象を中国風に表現したもので日本的な天狗像とは異なります。民間では天白など別称も用いられ、修験道の霊場では善悪両面を併せ持つ存在として大魔王尊と称されることもありました。鞍馬山の天狗信仰はその代表例で、除魔招福の靈力を恐れとともに信じられてきました。

天狗と山伏が同一視される背景には、修行によって山神と一体化し超人的靈力(験力)を得るという修験道の思想と、法会で行われた延年舞などの芸能において、山伏が天狗面をつけて舞ったという実践の両面があります。天狗面は伎楽面に由来し、鼻高天狗と烏天狗という二つの造形が成立しました。さらに、怨念を抱いて死んだ人が天狗になるという「魔道に堕ちる」観念もあり、中世の動乱を怨霊天狗の仕業とする説話や、それを風刺した『天狗草紙』などが生まれました。また、天狗は祭礼や民俗芸能、能楽にも多く登場し、各地の山の天狗は現在も信仰を集めています。

一般に知られる赤顔長鼻の天狗像は比較的新しく、もとは山中に住む異界の存在、すなわち山人のイメージが基層にあります。天狗は怪音や怪火、神隠しなど多様な怪異を起こす存在とされ、それらは山の神の意思の表れと受け止められました。こうして天狗は畏怖と親しみの両面をもつ存在として、長く日本の民間信仰と文化の中に生き続けてきたのです。

日々の生活において、どうせなら鼻高々な天狗様ではなく、人の為に尽力できる善天狗となれるように威儀を正して暮らしていきましょう。

千葉県富津市 真言宗智山派 福聚院副住職

宮城県名取市在住

今回をもって本連載を終了することになりました。

この間、多くの方々にお読み頂きましたことに感謝申し上げます。

J Aほっと通信編集委員長 曹洞宗昌林寺 住職 松山宏佑

(仙台市若林区三本塚)

(本文1207字)